

私立高等学校 2017年度入試予測

首都圏の私立高校入試は都県ごとに制度や受験事情に違いがあります。それぞれのエリアの「入試地図」をつかみ、注目校の「動向」などもチェックを。そして私立で「成功」を収めるための受験プランや作戦を立てていきましょう。2016年度の状況を都県別に追って、2017年度入試の最新情報もご紹介します。

東京都

難関校で「変動」起きるか？ 押さえは「併願優遇」で確保

東京都内の私立高校で2016年度に高校募集を行ったのは182校でした。応募者の合計をみると、推薦入試は約2万3400人、一般入試は約8万1400人で前年と比べて大きな変化は出ていません。

受験のメインである一般入試では、全体の「実質競争倍率」（総応募者数÷総合合格者数）は前年から横ばいの1.38倍となりました（都の生活文化局の調査）。ただし、これは応募者数で算出したもので、実際の受験者数による実質倍率（平均）は1.2~1.3倍程度とみられます。

近年の一般入試は「併願優遇」（後述）の制度が多数の中堅校などに広がり、倍率的には「受かりやすい」ところが多くなっています。

都内私立では一般入試は2月10日に開始され、13日ごろに大半の学校で試験を終了します。主な難関・上位校の状況などをみてみましょう。

2016年度に、最難関の**開成**は倍率3.3倍でした。同校では最近、倍率3倍台が続いています。ほかの男子進学校は公立（都立）志向の「逆風」を受けており、**桐朋**では1.9倍、**城北**は1.4倍、**巣鴨**は1.3倍と倍率2倍未満に。**本郷**、**成城**ではやや低下しながらも、それぞれ2.3倍、2.2倍と2倍台を維持しました。女子校では、**豊島岡女子学園**は倍

率2.2倍（前年2.1倍）に。

大学付属校に移りましょう。**慶應義塾女子**では近年の倍率は3倍前後だったのが、前年に2.4倍にダウン。しかし2016年度は受験者増（41人増）と合格者の絞り込みで倍率3.2倍にアップ。

早稲田大高等学院では受験者減（32人減）で倍率は2.6倍→2.5倍とわずかに低下。**早稲田大系属早稲田実業学校**の倍率は男子枠3.3倍、女子枠3.2倍でともに前年とほぼ同じでした。

青山学院では受験者増（男子71人増・女子51人増）となりましたが、女子合格者の増員が目立ち、倍率は男子2.4倍→3.0倍、女子4.1倍→3.2倍で上昇、低下と分かれました。同校の試験は例年2月12日ですが、2017年度は日曜を避けて同11日に移動します。

このため、12日校の**明治大付明治**（2016年度の倍率2.5倍）は、**青山学院**との競合が解消され、受験者増、倍率上昇も予測されます。その一方、11日校の**中央大**（同2.9倍・繰り上げ合格を含む）などは、**青山学院**に受験生が流れて、やや倍率緩和となるかもしれません。

また、**慶應義塾**（神奈川・男子校）が1次試験を2月12日から同10日に変更します。10日試験の難関校、例えば**早稲田大系属早稲田実業学校**などで男子の受験者が減るといった、かなりの影響が出ると思われます。

中堅レベルなどの学校で、一般の受験者が増加したのは、**八王子実践**（573人増）、**駒込**（253人増）、



豊島学院（235人増）、**駒場学園**（226人増）、**日本大豊山**（208人増）、**修徳**（148人増）、**安田学園**（141人増）など。このなかで、**日本大豊山**は併願優遇の導入が人気アップにつながりました。

多くの中堅校などは一般入試に「併願優遇」の枠を設けています。これは他校が本命でその学校を併願（第2志望以下）で受験する場合の制度です。各校が定めた内申点の基準などを満たせば、入試前の段階でほぼ合格が決まる、または試験に一定の加点をするという「優遇」があるのです。都立志望者などが押さえ（すべり止め）の都内私立を確保する手段として近年、定着しています。

次に、推薦入試をみていきましょう。都内私立で2016年度に推薦を行ったのは168校でした（全体の9割以上）。推薦の試験は1月22日以降です。

都内私立では、単願推薦（第1志望）のほか、併願推薦（通称「B推薦」）を併用している学校もかなりあります。ただし、東京の受験生には単願推薦のみという決まりで、併願推薦は同様の制度がある埼玉、千葉など都外の受験生が対象です。

中堅校などの推薦は、単願、併願ともに「内申基準イコール合格基準」という高校が大半になっており、この場合は12月の「入試相談」（各中学校の先生と私立側の話し合い）でほぼ合格が内定します。そのため1月の推薦本番は「無競争」（全員合格）となるところが、とくに単願推薦が目立っているのが実状です。

一方、難関・上位校などの推薦では、内申基準は出願条件とされ、本番の学科試験、面接などで競争が行われ、倍率2~4倍台の高倍率となる学校もみられます。

では、2017年度入試の変更点などを挙げておきましょう。**芝浦工業大**（現・板橋区）は江東区豊洲の新校舎に移転し、共学化する予定です（併設中学校は男子校のまま）。校名は「芝浦工業大学附属」に変わります。このほか、**新渡戸文化**が共学化を行います（併設中学は2014年度から共学化）。

麹町学園女子は高校募集を再開、東洋大グロー

バルコースとして募集します。**玉川学園**はIBクラスの一般募集を開始。コース改編などでは、**神田女学園**がグローバルコースを、**日出**は国際コースを新設。ほかにもグローバル系のコースが増えそうです。**駒込**は理系先進コースを導入します。

神奈川県

一般の併願制度を上手く活用 慶應義塾は試験日を前倒し！

神奈川県の私立高校入試について、推薦入試からみていきましょう。2016年度に神奈川の私立52校のうち、推薦を行ったのは47校でした。推薦の試験は1月22日以降です。

県内私立では推薦は単願（第1志望）のみで、本番で学科試験は行わず、面接、作文などが課されます。各高校が定めた内申点の基準などを満たせば、12月の「入試相談」（各中学校の先生と私立側の話し合い）の時点で合格が内定するという「無競争の推薦」がほとんどになっています。2016年度も、推薦で不合格が出たのは**慶應義塾**（倍率は3.3倍）、**日本女子大附**（同1.3倍）などに限られました。

では、一般入試に移りましょう。県内私立では一般入試は2月10日以降に実施されます。

県内私立を押さえ（すべり止め）にする場合は、一般入試の「併願受験」や「書類選考」の枠が多くの受験生に利用されています。

「併願受験」とは、公立など他校に不合格となったらその私立に入学すると約束して、各校の内申基準などを満たせば、12月の入試相談でほぼ合格とされます。一部の上位校などを除く、県内40校以上でこの併願受験を実施。それよりも内申基準が低い「単願受験」を併用する高校もあります。2016年度に併願、単願受験を利用したのは約4万人でした。

「書類選考」の制度を一般入試に取り入れる高校も近年はかなり増えています。これも各校の内申基準を満たして入試相談を経れば合格となるもので、書類審査のみですから、試験を受けに行く必要もありません。そこで、書類選考で押さえ校を確保して、空いた日程で他校の一般を受ける作戦も広がってきました。

ただし、書類選考の実施校のなかで**法政大女子**、**法政大第二**は単願者（第1志望者）のみをその対象としています。

「併願可」の書類選考は、**鎌倉学園**（2009年度

導入)を皮切りに、藤嶺学園藤沢、横浜、武相、関東学院、藤沢翔陵、北鎌倉女子学園、聖和学院、アレセア湘南、湘南学院、湘南工大附、鶴見大附、横須賀学院、横浜商科大、相模女子大、緑ヶ丘女子、麻布大附、桐蔭学園、横浜創学館などと導入が続き、2016年度は20校で実施。書類選考の受験者は合計で約5400人となりました。

併願受験や併願可の書類選考を行っていないのは、慶應義塾、日本女子大附、法政大女子、桐光学園、法政大第二など一部の上位校です。

上位校の一般入試の状況はどうでしょうか。2016年度に倍率が高かったのは、中央大附横浜のオープン(6.6倍)、山手学院のオープンB日程(5.7倍)・同A日程(5.1倍)、法政大第二の「学科試験」男子枠(4.4倍)、慶應義塾(3.3倍)、法政大女子の一般B(3.3倍)、法政大第二の「学科試験」女子枠(3.2倍)などです。

法政大第二では2016年度に共学化を行い、「学科試験」は受験者が前年に比べて331人増(660人→991人・男女枠の合計)、男子枠の倍率は前年(3.4倍)よりもかなり上昇しています。

さて、2月の一般を「オープン入試」で受験するパターンもあります。併願受験などの実施校では、内申を使わずに本番のテストで合否を決める枠がオープン入試と総称されています。2016年度は麻布大附、横浜商科大で新設され、オープン入試の実施校は27校に増えました。「内申点より入試学力で勝負したい」「併願受験で確保した学校よりも『上』を狙いたい」といった受験生はオープン入試にチャレンジしてみるのもよいでしょう。

2017年度入試の変更点では、慶應義塾の試験日変更が最も注目されます。同校は1次試験を2月12日から同10日に前倒しします(2次は同15日→同13日)。このため、ほかの上位校では10日試験の男子受験者が減り、逆に12日試験は増えると予想されます。慶應義塾自体は10日への参入で東京の難関校と競合し、受験者減となるでしょう。ただ、その場合でも合格者数を絞ることが考えられ、



同校の倍率変動などの予測は難しいところですが、そのほかの変更として、聖ヨゼフ学園(女子校)が高校募集を開始し、推薦、一般(書類選考のみ)で各20人を募集します。

埼玉県

「1月併願」が中心の受験地図 個別相談会で合否の打診を

埼玉県の私立高校では入試開始日(1月22日)だけを定めており、「推薦」「一般」といった日程の区分はありません。例年、大多数の高校が1月22日から25日ごろに併願入試(併願推薦)を複数回、実施します。この1月の併願入試が山場となる「1月中心」の受験地図が定着しています。

1月の併願入試とは3月の県公立入試まで他の高校と自由に併願できるもので、さらに、事前の「個別相談会」(後述)で合格がほぼ判明するというメリットがあるのです。このため、公立第1志望者などがとても利用しやすく、1月併願の枠に毎年、人気が集まっています。

2016年度も、県内私立の総応募者のうち、1月併願入試が約76%と大半を占め、単願入試(単願推薦)は約17%、一般入試は約7%でした。

この併願制度で押さえ(すべり止め)の県内私立をしっかり確保。そして公立やさらに上位レベルの私立にチャレンジという受験パターンが埼玉では定番化しているのです。

県内私立(47校)で1月併願の制度がないのは、難関校(慶應義塾志木、早稲田大本庄高等学院、立教新座)や、音楽系の高校(東邦音楽大附東邦大第二、武蔵野音楽大附)などに限られています。

さて、1月併願、または単願入試を受験する場合は、各私立で夏ごろ～秋以降に実施される「個別相談会」に必ず出席しましょう。この場で、模試の結果や内申点(1、2学期の通知表のコピー)などを提示すると、私立側が併願、単願入試の合格の可能性を話してくれます。学力段階別のコース制の高校では「その成績なら〇〇コースで…」などと詳しい説明やアドバイスも受けられます。

2016年度に、併願、単願入試など全体の受験者がかなり増加したのは、正智深谷(397人増)、国際学院(296人増)、大宮開成(295人増)、花咲徳栄(282人増)、東野(325人増)、東京成徳大深谷(218人増)など(3月試験<2次募集>を除く)。

一方、難関校は「個別相談型」ではない推薦入試(第1志望)、一般入試を実施しています。

2016年度の一般の状況を見ると、慶應義塾志木は合格者の絞り込みで倍率3.6倍→3.9倍とややアップ。早稲田大本庄高等学院の男子枠は受験者減(63人減)などで倍率3.4倍→3.1倍とやや低下。女子枠では受験者が増え(57人増)、倍率4.6倍→4.8倍に上がっています。立教新座の倍率は前年から横ばいの1.9倍でした。

県内私立では近年、コースなどの改編を行う学校が目につきます。2017年度には、浦和麗明が福祉進学、ペットマネジメントコースを募集停止とし、特選、特進(I類、II類)、進学α、進学、保育進学、調理パティシエの6コースに変わります。

大宮開成ではこれまでの5コースから特進選抜の先進、I類、II類、Sの4コースに、武蔵越生はS特進、選抜I、選抜II、アスリート選抜の4コースに改編。山村国際は特別進学コースを新たにA、Bに分けて、これらと普通の3コースで募集します。各校のコースごとの指導体制なども十分に確認しておきましょう。

千葉県

年々強まる「前期勝負」の傾向 難関・上位校で5科入試が増加

千葉県の私立高校入試は、かつては「推薦」「一般」の枠組みでしたが、2007年度から「前期選抜」「後期選抜」の制度になっています。試験は前期では1月17日以降、後期は2月5日以降に実施されます。近年の大きなポイントは、大半の高校が「前期中心」で定員を割り振り、後期の枠は狭いということです。県内私立の全体では、前期の定員比率が2016年度は約93%にのぼりました。

後期の枠を廃止して「前期の定員が100%」の高校もみられます。2016年度に千葉私立54校のうち、後期を実施しなかったのは以下の15校です。聖徳大附女子、不二女子、和洋国府台女子、市原中央、木更津総合、志学館、翔凜、拓殖大紅陵、千葉英和、千葉敬愛、東葉、日本体育大柏、日出学園、八千代松陰、麗澤。そのほか6校(植草学園大附、秀明八千代、千葉県安房西、千葉明德、中央学院、流通経済大付柏)が後期の募集を若干名としました。

2017年度には渋谷教育学園幕張、芝浦工業大柏が後期の枠を廃止する予定です。

学校側の動きと同様に、受験生も前期へと大幅にシフトしています。2016年度に県内私立の総応募者のうち、前期が占める割合は約94%でした。

このように千葉私立の入試地図は「前期勝負」の色合いがとて強くなっているのです。ただし、前期で不合格になっても、「絶対、合格したい」という学校であれば、悔いが残らぬように後期で再トライしたほうがよいでしょう。

中堅レベルなどの学校は、前期の推薦(単願、併願)が受験のメインで、とくに併願推薦(第2志望以下)に多くの受験生が集まっています。

単願推薦(第1志望)、併願推薦はともに各校が定めた内申点の基準などを満たせば、12月の「入試相談」(各中学校の先生と私立側の話し合い)でほぼ合格とされるところが中堅校などでは大半です。こうした併願推薦で押さえ(すべり止め)の県内校を確保して、公立や上位レベルの私立にチャレンジという受験パターンが普及しています。

また以前の制度(2006年度まで)とは異なり、近年は前期で推薦、一般の両方を実施する学校が増えてきました。推薦の内申基準に届かない場合、その学校を前期の一般で受ける作戦もあります。

一方、難関・上位校では前期、後期ともに「テスト勝負」の一般を実施しています。

主な難関・上位校の2016年度の状況をみてみましょう。県内最上位の渋谷教育学園幕張では、前期「学力枠」は受験者増(128人増)と合格者の絞り込みによって、前年の倍率2.0倍から3.5倍へとかなりアップ。市川の前期(一般)、後期はともに受験者がやや減って、前期の倍率は2.6倍→2.3倍に下がり、後期では合格数が大幅に絞られ4.3倍→7.5倍と急上昇。

昭和学院秀英では、前期は合格者の増員で倍率2.7倍→2.6倍と若干低下。また後期は受験者減(86人減)で倍率4.3倍→4.2倍と若干下がりました。2017年度は東邦大付東邦が高校募集を停止するため、同校と試験日が前期、後期(1月18日、2月6日)とも競合していた昭和学院秀英に影響が出て「受験者増」と予測されています。

なお、茨城県では、県内トップ校の江戸川学園取手は一般を2回実施(1月15日、21日)。医科コースの倍率は1回、2回とも2.6倍に。普通科コースでは、医科コースからのスライド合格を含めると1回、2回とも1.2倍となりました。

2017年度には上位校の試験科目変更にも注意しましょう。市川は前期(一般)のみ3科から5科に変わり、昭和学院秀英では前期、後期とも3科から5科に変更。芝浦工業大柏は5科・3科の選択制とする予定です。コースなどの改変では、成田が特進αクラス(定員40人)を新設します。